和歌七部之抄

百人一首 上下

伊地知文庫
文庫20
292
1

文庫20
1-292
1

伊地知氏書庫

右百首を京極黄門小倉山荘障子色紙和歌と
なし給ひしより百人一首と号ぜしなり是とそこの
ちかく変じて新古今集の撰定家卿のよみかた
はしるべ歌道を学ぶ世とかなめ民とみち
ものの教戒なるべしもとより志ある人実を拾ひて
花と枝葉とをさとり形ちを拾集ハひとつの
花をかざして実をとるべきなり物にいとふ
なかれ人しれぬ実門の孤まろこまをと
ひ情ぬしの移香よりなを百人の歌とそうしの秋岩
よ書とそうそう物くしぬ物乃ものさい実と家して

殺生関白とかの為ゝ家長卿に長慶院御時勅撰の新勅撰とゝ
ゝ撰集ゝ也百首と和
同ゝ人ゝ十分ゝ寛ハ元年ゝ花ゝ二月分た
海人さうや古今集ゝ花寛ゝ撰集乃集ゝ
ゝ後撰ゝ寛ゝ春ゝ拾遺ゝ花寛
和歌ゝ撰ゝ御院ゝ撰ゝ続ゝ其一集
ゝ代ゝ建立ゝ時代ゝ風ゝ作ゝ
変ゝ後撰新古今集ゝ源頼朝上皇
ゝ撰ゝ撰ゝ海悔の
変侍ゝ撰ゝ撰ゝ黄門の心ハ明ゝ

抑此百首人数ゝ撰ゝ世ハ
ゝ世ゝ撰ゝ人ゝ撰ゝ不変ゝ
ゝ撰ゝ定家ゝ世乃人の
撰ゝ変ゝ平撰数ゝ撰ゝ世
ゝ撰ゝ変数ゝ撰ゝ人
乃ゝ撰ゝ撰ゝ撰ゝ
ゝ撰ゝ世ゝ撰ゝ
撰ゝ人ゝ名誉ゝ
ゝ撰ゝ黄門ゝ世ゝ人ゝ
ゝ撰ゝ世人ゝ

たりつみのれんよ隆分と加し歌すくみも入合き
まつかくく意をしく海くしうや為家卿の代よりの
初くたりを中ほのまりとを当時もかれ文紙
のうらめくに世ほ海りて仕りの世歌ハ家りに
仕りとり変めくく後鳥羽よりと海ほ仕りくさうを
続と大りうの打ひきうハ続ほりうを
志ゆくハ傳受宵くき変なり此関式を続代の
俗ら歌のめくくきのうハ濃のうハ此歌へうくく
此百首ハ二条家ハ背関なりハ此歌俗歌定乗
ちくりくきうたりくく変くて師現侍くく

藤原殿流歌云新古とと撰やくく海く時分を
定家卿ハ母姉去ゆくく喪よりまりハ無
以後之新古ハ卿ハ乱れ合うくくゆ
新古のりうよりれやうきき流ようりて新
勅撰ゆハ実きくうくゆ此百首ハ巻部ハ天智
てをとりりうくく変いてて下の民と何ほまて
なくくき

小倉山庄色紙和歌抄上　全玄恵　釋明空

天智天皇

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣は露に濡れつつ

春過ぎて夏来にけらししろたへの衣干すてふあまの香山

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける

穢（けがれ）をはらひしる之是ハ述懐（じゆつくわい）乃御歌なり
時にて流りし唐めかしく荒唐（くわうこう）にへだたるを救（すく）ひ
可笑（かしこ）哥は歌の上代の風なり上古（じやうこ）ハよくまことを
ちかひ文人の詞（ことば）ハ巨細（こさい）になきさまあれど流麗し
誠（まこと）ゝ余情（よじやう）を称して唐哥をとる也

二　持統天皇
天智天皇第二王女
天武帝皇后号天皇后
草壁皇子母

春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

香具山ハ大和国山 ときめく
よくて色々の衣を
とりほすや夏衣の
時分のはじめ也
杜詩二月欲破
三月来り夏に立
のさまを読也

右歌春過て夏来にけらしといふ句（くち）縁（えん）
は夏の初（はじめ）にて時（とき）の移（うつ）りやすきを云
うき流人をさへや此哥を夏衣（ころも）に定

其歌（そのうた）ハ天香久山（あまのかぐやま）を以て春の霞（かすみ）の衣（ころも）を
くあらひくしてされを見てなつ来ると
読（よみ）ん露（つゆ）て立（たち）そめて夏の色よ此山さらく
と明白（めいはく）よそほふと白妙の衣ほすとは云也
白きハ衣の縁（えん）にいふ時のみゆる事をたとへて白
妙の衣とハ云ふとも人の着るハ霞の衣なれ
ハまてる流山にある夏の衣とをさなき哥の底ふかき
読（よみ）し白妙の衣とは云う霞の衣とことなる云
流詞（こと）なりさまて来るといふて夏来（き）
ましとよみなるをみ此歌の大切の詞

せ此歌新古今の撰乃奏覧に入りし定家の歌
の為く世此の事も心中にもあらくれしまて
ありしとそ申侍し其後諸書に此歌を
しるし定家卿 ○大井河のしぬ井とさ
とのまぢ人某事にまつりと夜須とく此歌
ハ井とれによる流を夜といふこまつりかく
丁寧ちんそ

柿本人麿 天武天皇御時の人也 柿本はうぢ也 人丸は名也

足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝ん

歌の心 折ふしは山鳥の尾のしだり尾ながながし
とひくしし夜をと云ん為の序也
ながき秋の夜すがら詞のつゞき妙にして
風情も長くやさしき歌とは眼にたちてき
こえ吟して其味をしる事ならし 此歌ハ
古今和歌集にも人麿の哥也と定め
し古流哥とも京極とのおもひかけ
又定家の歌の道の古今にかゝる独歩のこと
その心理にや

山邊赤人 山邊ハ氏也 赤人ハ名也 聖武天皇の御時代の人也 人丸同時の人といふ ゆへに天平し

白妙ハ布の色の白きをいふ
田子の浦に打出て見れハ白妙の富士の高根に雪ハ降つゝ
此歌ハ今田子の浦の名くひろきを立出て見れハ
眺望かきりなくして其詞も及ひかたく富士
の高根の雪をみる心をいへる也吟味すへし
海辺の面白き事をも富士の雪の妙なるをも
詞にいはて変なくして其さまのこりなく作りたる
ことに奇異なる深切にして歌人の手本とは
古今の名歌もいやしく妙なる体といふ
のこく雅に此言を作りしといふに余情ありて
なし當意即妙の理を云へし長歌の

奥の反歌也万葉には白妙にそふしの高ねに真白に
ありとそ

猿丸大夫

奥山に紅葉踏分鳴鹿の声聞時そ秋ハかなしき
此歌ハ奥山とハいへる所もさためす秋のふかく成り
くハ木の山すそハ紅葉のちる比の深山の陰を頼
て鹿の声物を哀傷の歌なり○龍田山抔ま
たふかき紅葉のちるのたよりにふかく成
といふよく心得へし此の作りなる秋
ふかくなりて深山の紅葉の散しけるをしるへ

鳴く鹿のこゑをきく時の秋ハいちしるくかな
しく此秋をせつなる秋と忽ち人にかなしきへ
しと述へん余情ありうまさしやかすかん此哥
を猿丸太夫の哥の織にも待ちん月やかうね
猿の歌よこゝろをいひ述けるとそ

中納言家持 大伴宿祢 大納言旅人之子

鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れハ夜そふ
けにける

此かさゝきの橋ハ夏七夕なといふ所ハ御階をいふ
すや殿上の夏ハ雲の上のといふかたも大内をいふ
まけく鶏の声もしらえ涼しうろ人の流よ
あさくろ霜の夏之さま述へかきあらはし侍る
と此歌ハ仏をたのしくみしく月をあく空も
晴てる夜寂ハ天よみちく清き冬さしも涼
夜みるに冷さ出て此歌と思ひて感情をて
かきり首へくらそて此歌○鵲のさゝ渡し
の霜ハらと夜半に冷ゆる見えて居るを流しま
しれし

安部仲麿 舟守之子

天の原ふりさけ見れハ春日なる三笠の山に出し月かも

是ハ仲麿を唐土に物ならひにつかはされ

けれども後朝の河竜と云ふ人
ものを一情をくる河月をとりて流るるとぬ
つきけみをてんとゝ姫うの作くゝ源氏の紅葉
流よ提とゝ花はよりし流之より作菊葉
くゝ流てゝ山をゝ唐人の名ゝ詩をむ
月を明よりもゝうて天津宮をゝ
源宮をゝ山と源流書き
歌公家とゝ書よ入ゝ源れるくゝ
くゝ山歌ゝ唐人の名詩と注云天京
とゝ書朝の変とゝくゝ見くゝみ作つき

変とゝ長くゝ余情ゝ物ゝ幼元入道
変物ゝ流書ゝ一ゝ下と我物ゝてゝくゝ
ゝ月ゝ一天下月物ゝて流ゝ
ゝゝ物ゝゝ見ゝゝ変ゝ日記
海ゝ物ゝ流みをとゝ

喜撰法師 和歌九部之一道 喜家山人 花月流祖

歌書ゝ新古今ゝ
日山歌ゝ山歌ゝ大ゝ明ゝ世ゝ宇治山ゝ人ゝ云ゝ
ゝ宇ゝ流ゝ風ゝ
みゝゝゝゝ世ゝ宇治山ゝ人ゝ

いつもとも有へき歌と人〻いひあへりとなん
はるかに見し秋の月を今宵明州にて見しより
あはれとし書れ侍る事御説とうけたまはりぬ猶秘贈
もろこし月録によりてしるへし

小野小町

小町は姫のことく仁明天皇の時分の人也

後撰集寺殿御説云小野良実か女也

花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

是はうつろふ花によそへて我身のおとろへをなけく心也

長雨のあはれさや花の色はうつりぬる
すくさず折節くをしみつゝ過しぬと言へ
下にはかなく花の色はうつりて我身はさかり
のすきし人の行末を思ひて我身世にふるの詠
ぜしまゝにおとろへ行むかしの姿を思ひ
人はすひき人をしたひ世をかこちなと
も深よりの物をけしく折節にして
ふかまりに我身の花もうつりし也まことに哀れの
心は人々に見せて人のきえとゝまる物語
作りし人のまた史となれり

蝉丸　相坂の蝉丸とも云

此明てより此所分の人之一返道之着之世を
そねみて髪をおろしまうしかるを
是によりて世人翁とはなりしなり
常に琵琶人なり　琵琶は此所の師手の名事
是は此所に庵をむすひて居給ふ
此歌の文字かきて相坂の實は盲目
つくづく物をおもひて人とそて必首
無やこのうは逢坂の関に落つく文字遣
面は姿のは法の名はうくの名

會者定離の心之詞も流啄の名也
関と云事を深くも儀なり萬法一如り
海も源理とて妙覚沙弥三句あり下へ
此くの歌之蝉丸の同所にしも又濁
の円見濁と一河なるへしなり

象儀名　象儀参考にあり

侘識てとそつきて善悪業也と云物を
云ふ在遊して又遣唐使よりして一合
船二合船と號して在遊して野相公
和田の原八十嶋かけて漕出ぬと人には告よ蜑の釣舟

僧正の此歌の下句に乙女の姿…[illegible]

是ハ仁明天皇の御時隠岐国にながされ給
ひし時難波より船に乗て出給ふとて京なる人のもと
へつかはしける也和田の原ハ[illegible]
[illegible]の人たる海路の遠き
[illegible]流人[illegible]
[illegible]漕出[illegible]
八十嶋かけて[illegible]
[illegible]
と釣舟によせて人に[illegible]
[illegible]物ニ[illegible]の人[illegible]

と釣舟によせて[illegible]也按ニ篁ハ参議[illegible]の[illegible]八
十嶋を[illegible]文[illegible]氏[illegible]
きく也

僧正遍照　大納言良岑

仁明ノ時ハ家[illegible]
天台[illegible]密[illegible]学[illegible]

桓武天皇の第八男之[illegible]
[illegible]嘉祥元年ニ出家して一流の
[illegible]を伝へ九十[illegible]
[illegible]

天津風雲の通路吹とぢよ乙女の姿しばしとゞめん

乙女子の[illegible]

とうあさひめて此名を舞し歌ひとく

の舞ゆ姫と天乙女よ讃すきり幻ゟ女ゟ山字
ミ物也遍照ハ歌ゆハら風ゟす風ハ霧ゟ隔す
すさ仍定家ハつの吹よゟすことそゟかしさ
此舞姫よ乞よく承ゆは伝もし功之入道殿
浄御原天武清見原天皇芳野山ゟて琴をひ
もし時ゟ神ゟりゟしくゟすひゟそて其中
まて雅女ゟて曲を舞りしよりこのゟとう
より近代大嘗会ハ時ゟ女ゟく大嘗会ゟ丑
寅ゟ日ゟ日ゟ月合よゟ承しゟゟく

霜月丑日ゟ行ゟるゟ之天子ハ大嘗会
舎舞姫ハ此事也

渇職燈 浄和の作者之

悪蔵ゟゟゟ

幾波経れ筆よりゟつゟ家の代 ゟて経りて浄ゟゟゟ
乞ハ泪のゟ女ゟりゟゟゟしこの娘きさゟりと姫と
水の趣ゟすゟ流ゟりて倒とゟ承よゟゟ人ゟゟ
く惣ゟ序歌之哥の心ゟ是まゟく之ゟて君
の代歌ゟくゟりしろさ故ゟる之天つの代ゟ
心ゟさかの支てゟりしゟゟてことよ君ハ天
下の徳とゟり悪ゟてゟ下の慈とゟゟゟ
大ゟの人ゟゟ此ゟゟよつきゟや仍て此統
云浪ハ始鑑觴入事則無座

河原左大臣 融 嵯峨天皇ノ御子

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

此二句みだるゝ序也 思ふ心をしのぶ我ハ人ゆゑに
みだれそめにしそ君ゆへにこそといふ心也

光孝天皇 仁明御子

君がため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

是ハ宵公(しゆんてい)の歌也 又ハ公の御時を
宗之詞(ことば)の身のまゝとゆふ歌也 はかなく読て
分別(ふんべつ)あるべし 心を隠さバ心しられける
人君ハ下に心ありて一つくあるべし かなふべき

夏と堪ぬのしるしを読 此歌のしるしを読
也べし

中納言行平 在原阿保親王子

立別れいなばの山の峰に生ふるまつとしきかば今かへりこん

此歌ハ行平(ゆきひら)因幡守にはまりける時に下向の時よめるなるべし
けるとをまつ人とふべきなりしまふこと
ある遊覧(ゆげん)なりとて心に明く人に待(まつ)人をまつとよみし
ハ在りし所にかへりこんと云への待(まつ)人なるべしと
云也と心得べし

業平朝臣

ちはやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは

此ハ秋紅葉のころ神無月なる比立田河のおもて
錦をさらせるやうにて流るゝを紅の事葉にたとへ
まし紅(くれなゐ)をくゝるやうなる景色を神代より
か様の事ハきかすと也 業平の歌ハ大略此
やうにて詞たらぬを是とも申けるよし家
の人々ハ此歌を入られしハ此百首
の趣(おもむき)を見侍るへきとそ

藤原敏行朝臣 右兵衛督 按察使富士麿子

住の江の岸による浪よるさへや夢の通路人めよくらん

上二句ハ序なり よるさへや夢の通路
よくらんと也 うつゝにハ人目をよくるも
さもあるへき事なれと夢にまて人目をよくらんと
いへる心あはれなり 身のはかなき事
まことに深くよみたる歌なれは 此百首
にえらひ入られしといへり 細かに是を
さとりてよむへし

伊勢 宇多天皇の御時 伊勢守藤原継蔭女

七条院に侍し人なりと

難波潟みしかき芦のふしのまもあはて此世を過してよとや

此雅俊ら[illegible]大屋[illegible]ひ初[illegible]ら文
字[illegible]五文字[illegible]歌良[illegible]おり[illegible]を是いさ[illegible]
ら[illegible]と[illegible]とひ[illegible]く雅[illegible]物[illegible]わらく
く三首別歌の[illegible]い物[illegible]ひ初[illegible]ら[illegible]
人も縁とり[illegible]物[illegible]尽[illegible]ひ[illegible]
あ[illegible]ものら[illegible]ら[illegible]ら[illegible]
ら[illegible]て年月と[illegible]れ[illegible]
と[illegible]ひ[illegible]ら[illegible]ら[illegible]
縁[illegible]ら[illegible]れ物[illegible]の[illegible]ら歌
[illegible]ら[illegible]の[illegible]

元良親王　陽成院御子

俊[illegible]れ今[illegible]ら[illegible]雅俊[illegible]
是八字多[illegible]門の[illegible]時[illegible]の[illegible]
[illegible]ひけ[illegible]ら[illegible]
俊[illegible]ら[illegible]の[illegible]
[illegible]ら[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

素性法師 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文屋康秀 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うしろ姿とて
ゑすがたこそ
撰なくに山風祭の幸ありて入侍りしく
変とあらしとて
きしくらべて名ゆゑ通盛とさ
祭りしくれ
濁り五位く

貞信公 名宗忠卒 孫 十一条摂政

少将山蔭朝臣桂参ゐ給へと一方の御ゆきまうゐん
是を亭子院大井川より御ゆきあるべきなり

有あけの月さ所ゆく作さ所ゆよ変乃うし
参へ世人として此歌を撰り色ゆ明れ
事と我所よりゆきしして桂より作とゆ所
と花野まする所や亭のさ毎れ信とるれて
いかしくゆ所の梅花院変御所云御ゆ云
洞る所ひて後とし

中納言為輔 名藤原 中将朝臣

みやこいわさてゆ泉河ゆづ所さて云ゆ云
わさてゆうしく泉河の泉河ゆ
ささというん所ゆ也是も序ゆく泉河ゆ

うゝやうの人はいとゝ絶果てあるなるこゝろをもひとりひやうをとゝ感じて我ゝとなりて
てゝうゝ一向あはれとなりて人と年月をくらしてゝうゝやうゝ
てを歌のこゝろ海額なるゝ仏之道殿
沙汰ゝてとゝ我かひのゝきさゝ成ゝ
ゆゝあるゝ人と成ゝ云沙汰なゝ

元孝の藤惟忠の子ゝ王孫あゝ源氏と名乗ゝ

源の宇平朝臣

宣いあゝて無さまゝゝ人ゝ草と指ゝて

此歌い秋の林さゝもゝ紅葉ゝ
雖れ書ゝ
ゝを待ゝと名ゝ
ゝ沙汰ゝて人ゝ
くゝて人ゝ
日沙ゝ
仏之沙汰を
女房ゝ

元河内沙汰 元名雅之 軍医寺 もとゝ人ゝ 作氏深隠利る

ゝあゝてゝ

行くすえかなんとて手向くいつまでか有慣て
かくて想ふんかの白雲はいつかうすくなりぬる
いくかひるよりあかぬ物なるよ初雪のつもる
涙ハ一しなみとうち添て人一しかぬ長雨と
なりにしかな

壬生忠岑

有明のつれなく見しあけ別れ暁ばかり憂きものはなし
別れ路に物思ふ時ぞつくづくと有明の月の
出てまちける
ひとりのみ見てやすらはん月の出てまちける
人の恨ばかりぞ

朝行く雲の明け方の月をみて

式部卿宮

式歌合はせの時の歌

[illegible]

有明の月とそらよりふる雪に

[illegible]

山の端の月の山もとの宮

春道列樹

[illegible]

式歌合せの時の歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人々さそひてよもの花をもとめけるに梅花匂ひ
来書よ初瀬まゐりしてこゝにやどりけり
家の久兼屋にて梅をいとをしみて
まとゐせ家にかはらぬ春の月
あるといひもて待ちまをしてこゝにやどりけり
梅花とかつて詠りけるかくはしるしるかん
とは久兼者にねんごろにみはやしぬ屋にて
りてあるうんとうひとりとうの色
明く貴之の歌い金葉たちわかさ歌ばせ古郷い
なりてこゝにつきてよめる

清原深養父 中務寺房明

春の夜の月のかげ
見いるかの夜の月やうん
ぬるとこゝにいまるこゝろひとつにあるの夜
月来宮元みてはんとみまほしい月を入れし
くゝ詠みてうとこのそこあるいかるとそこ
用いる行きこゝろ親の歌よいろうく歌ばさ
ぬるてこゝさあるや

大江朝康 先の祝之宮

白雪よ風の吹くく燃れ雪いはるぬこゝあるあ月を数く

遠方の雪白詠ハ
[illegible]
ぬるゝ袖をかこちぬるかな
[illegible]
[illegible]
[illegible]

今宵風雨とうくに人変化其人うしなはるてうくうよりと雑賀人しのまつ
宮れ山雲の清風秋の夕雲に歌とうたうと

平業盛　光孝天皇ゴ世平業盛

思ふとて色よ出まうな物やもつと人のうつまて
此言を義を明くそく人のとふまくみて
物言れうや歌をそ此ふ言れ方

主生忠見　歳ゴ　姓の内宿禰

思ふとて我ぬ涙さ立ぬ人ひとあり
思ふとて歌をそ重家よあり此首に言合の
日付よ
流ひとおくいかのまはりけうそ雑用ひたら
八宗九歌ますや仍光御所を歌合
初めて

清原元輔　歳ゴ　保昌父

袖さしと袖つくもつく変平よ人のうつて侍うう女人おうつてとき
人に流くもあくあらうれとみりひよ能と
忘うて流こさしと歌うけうまみと打て

ちしやうやうそうこ部会の神と言ふ
きさまのくうとん中ゝ服として祭り
しを歌ども

権中納言敦忠 四十二首

逢ふて見ぬ海のふかさに
人よりまさるあひ思ひ
れちさうりて思ひ初めのかひみくるる
を逢ふて見ぬ海に入ふ恋人と義とおもふ
まさうみの世の人目ともいふ
のんまいろひやうとやは

恋ふて見ぬ海に入ふ人の一ちまと思ふ人の一ちまと
義いうをひしいの数ぬるとかく
繰りうこ毎に歌もあまりよ毎ちくん
ぬんいやいすきうまを作るあ

中納言朝忠 三条右大臣定方男 母従五位下藤原朝忠

見いたゝわりのまよ何と明くいの味さ
ちくかなりうへしに出ぬ人と忘れて気ふ
なとも思ふ人いの法師ちくして年月とうう
ふりうしてなまさうみはる人のみちく

[illegible]

[illegible]

古人の歌とあまたよみ侍り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]泉流[illegible]

源重之 清和天皇御代 兼盛同時

てるもしらじ

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふころかな

たれかこゝろをしるべき人のつれなくてこゝろ

けぬるをしるとて侍りける

歌あはせ侍りしとき

[illegible]

みくさゝゝ[illegible]

大中臣能宣 伊勢守 [illegible]子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是は後の朝の歌にて一家の道すと
をはしまして合しめもかんとおもひてく
まの明神なりしもうれと清らの仏明の行基も
こひけるれと云所の見所と思ひ切の切
なりしなく我人の引きかへて待る事
ものいひもせぬ様見ゆる人きとまして

藤原資方朝臣 侍従貞時

九条殿所参給ふ実方とも成と殿上
給はりて宴の勧ふく引成のかりぬる
とおもきれとく異段奥殿へ歌枕みくま
ゆまてとう作ありく九重とて
うとたはなをいはいはしまし事所も思分ある島を
所も草にこみの山を後のいとりとゆる
よりなく之変くかくと思みえるやいつるの
とは胸をはまるひとも之ひ所にて
所もへいうてもんと我とるの切れる変
はなるるるとひのみるく

小倉山庄色紙和歌抄下

菅原道信朝臣　西蓮寺殿

明わたるとなく物とはなけれども　秋のなかばの月ぞ　ものうき

見い渡せば　秋の月　ものうきは　秋のなかばの月ぞ

後朱雀院御製

ながめつる　月の光　ものうきは　秋のなかばの月ぞ

ながめつる　月の光　ものうきは　秋のなかばの月ぞ

ながめつる　月の光　ものうきは　秋のなかばの月ぞ

てゝ[illegible]人と
歌つゝ独ゆく[illegible]ゆくまゝ[illegible]ふ
事[illegible]云へ道拾遺[illegible]
く明[illegible]れく[illegible]
[illegible]
[illegible]

をいとなみしく他とこそ法のたまてうを
お孫てなのを孫のをとこ法師
勢しとりなりて法師
人いたくなのを命の道とかりしをさんと法師
ようや宣いいなのもはしくをこそしてんま
親を法師なり宣をはしく冷味らんー

雅数女 母越中守保衡女

懐平女越前守女丸をし 和泉守橘道貞の女

和泉部 陸奥守納言

ありしを人をこそ和泉部をとそう資任ま
しとを法師なを

あくをはしめ法師なのをとをはしく今ーをなのあをりしまは
夏出ようをう例をなをを侍りをを氏人のりを人
をーをうをはしうを命をををを氏をを人をを
て強をを氏ををさんをうはんを長はをはしを
をををはしを侍りをを見侍をを人をさをををを
をんをうや出をををを侍し

陸奥部 越前守為守女

一陳院はしををををを
ををうをはしををををを金をを陸奥部 越前守
ををををををををををををををををを侍をを人の

年ゆくかはのみなそこ月すみて
ひさかたの月をまちてゆくかへるなり
なにはがたみじかきあしのふしあはで
くもゐにまよふ月をまちつる
あしびきの山どりのおのしだりをの
ながながしよをひとりかもねむ

大納言経信

夏の夜は
まだよひながら明ぬるを
雲のいづこに月やどるらん

大蔵卿匡房

高砂の
をのへの桜
咲ぬれば
人こそ見ねと
風ぞ吹ける

恋すてふ
わが名はまだき
立ぬるかな
人しれずこそ
思ひそめしか

権中納言敦忠

あひ見ての
のちの心に
くらべては
昔は物を
思はざりけり

中納言朝忠

あふことの
たえてしなくば
なかなかに
人をも身をも
うらみざらまし

壬生忠見

恋すてふ
わが名はまだき
立ぬるかな
人しれずこそ
思ひそめしか

右近

あひ見ての
のちの心に
くらべては
昔は物を
思はざりけり

恋すてふ
わが名はまだき
立ぬるかな
人しれずこそ
思ひそめしか

恋すてふ
わが名はまだき
立ぬるかな
人しれずこそ
思ひそめしか

[illegible]

赤染衛門 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

先に中務の歌ども和泉式部にとゝめて
永歌よりとゝめて侍けるとは情ゆかしく
はべる類なくゝゝ
為氏卿ひよりとゝめていはくゝとかく
侍るよりはくゝ人のゝうひとりし我名を
とゝ侍るゝ事なりさるやうひゝ當座
よ侍るゝ事はうひゝ歌ゝ
歌ゝれたる長歌ゝ行の長大
はゝゝ野ゝみゝ

俊成卿女情歌ゝ

正東門院ゝ位ゝ者ゝ

俊成卿ゝ歌ゝ

一条院の御時ゝ
ゝ侍ゝ
作ゝれゝ侍ゝ
あひゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝ
ゝ
ゝ

と詠み上げられたる道貞阿闍梨の歌よりとて
侍る歌

清少納言物忘れの名ある御方
四人いとゝいつもなきこゝろ元服女抱きまゐらせ
歌と綴て馬の命名をつけたるこゝろ
変出無大納言行成物忘して門の内に
こゝろもとるゝていつもこゝろうてけるかく馬の色
よりうたされたるつけ歌
和かんらく寺の実の事やとひきしらう
されこゝろ是をこゝろ

けるこゝろをいはゝ名を変出実はゆゑ
といふ事をもつけたるとも想の中に明地
けるくかんうくとおもはゝとこゝろ一首よ
強出実変是文よりもされたるさうの歌と
こゝろ抜ける一首言葉とゝふとゝよりも
て是の無心と歌ゝ故よ古人の歌ゝ
さとるかゝらよる物こゝ活人我の心出
こゝろみゝ名抜くこゝ作る歌や是神くゝ。
名とゝゝてみちのくこゝ
こゝ本ゝとゝ抜侍

家定道雅 従四位下 侍従

今うちうちの絶えんとうちうちとうちうちとうちうち

吹味ら〳〵さ歌〳〵ぬ

相模

源頼光朝臣の娘

おなじ寺大江公資女とゝ〳〵

恋絶ぬる物なるあら物と思ふ物ゆゑ情れ
ぬる物なるかゝれ絶ぬる物ゆゑ
恋ふる物なるかゝれ絶ぬる物ゆゑ
とかゝるとさゝ〳〵ゝるとゝゝ勢ゝ知て
うさゝ〳〵ゝらむまゝとゝゝ物ゆゑ
絶ぬるある物とゝゝ絶ぬる物ゆゑ
ゝ物ゆゑゝゝゝゝ有とゝゝゝ表ぬゝさゝや

為隆院殿ゝゝ明行の中納言ゝ明行ハ

二条院ゝゝ

清原ゝ表ゝ有ゝ山橋花ゝゝゝゝゝゝ

大僧正行尊 寺院法ゝ

表出ゝ大峯ゝ有ゝ山橋の咲ぬゝゝ

て清ゝ大峯ゝ有ゝ頃逢ゝ表ゝ表

とハ咲ゝ表ゝ逢ゝ峯ゝ当時

ゝ多ゝ秋ゝ侍ゝ頃ゝ表ゝ頃ゝ表

ゝ有ゝ山橋と咲ハ花ゝ月ゝ表ゝ表

歌ゝ花ゝ有ゝ表ゝ表ゝ表ゝ花

とも云ふ我うりあるものとなりと云ふ義原
へ行てふうてみる文字清れよ云ふと知りへとい
流へ出行るを白河院北御子圓満院の門跡
屋ひとりさ人ばかりにてはさるよ入
行ひ行ひ所しもうふ桜と思ひのひけつ河のさ
まとうくたるへく思行るを歌詠ばさ
後鳥の屋うへ人の行ばかりてうんぬるつかるつ行
四つ過ぎ人へさ変ちを仏元ち花は歌を自然と
ひくうとき

同坊門侍　同坊寺侍仲光

棟仲ら女ちく大略是元次泉院ら仕ふ女とち
長歌の長ひうり知ら知ら知ら知ら知ら知れ
変ら三ら二月ちうり月ありさ秋二条院ち人へ
物ばかりうり行りけるら同坊典侍ちりぬて
桜ちうりて思やうる云とやすく大酒ち忠家ち
と桜ちてうひる花ち月へ行へく行りを
花へ後行りく家かひるくいうひる花へく行り
へ知りてあいうひるれへ方へうを歌乃ち
明へ行りあるやうに屋さうさとうへ仕ふ
へ元あへ行りうる歌の初末ち方知る

うや道綱母伊勢女などいとこと云ふ歌詠の侍り
ける歌とぞ
[illegible]
後は内侍のかみとぞいひける
そうて源作と女の身にてうやうに作り名
をうて有ることは山歌のさま〻〻○[illegible]
[illegible]歌[illegible]より始めて
[illegible]
[illegible]

三條院御製 [illegible]

これ不例なりし時の御ゝ脱履はいとゝあはれ
けり歌とぞ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源俊頼朝臣 俊成の父 母は[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

也侍郎物語ものがたりとかきたるとかとぞ

[illegible]

源兼昌（みなもとのかねまさ）　播磨守（はりまのかみ）

淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

是は関路の島と侍るに千鳥鳴よ須磨の関守

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌

[illegible]

[illegible]

杜鵑の白き[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

心ゆく侍りしかば年老ぬ神にまかせたてまつる

ろかり

明月記　建仁二年七月二日題　華蓮法師

村雨の家もまばらに成ぬれば

月歌とまるうつの人のこと村雨の家の面白くを

さらぬ月見ばかりにまかせてぬよ家にぬれ

人面白さとてうつ中ゆうや時雨ぬ

とそ思ふ人やうぬ神にうぬ歌ハ人ぬ

く深くけよりうぬ変ぬ心ぬ見ぬ

ぬ人源山秋夕ぬ人ぬ人ぬ

源俊頼朝臣の家にまかりて月の歌ども

よみけるに　人人

宮内卿　宮内卿　基平朝臣

源俊頼女　宗尚院御　月物殿御女

那波師平の孫の一条摂政

是ハ藤宿通忠の孫　苔ぬ孫の一条摂政

ぬ人ぬ身と思ひて　那波師平の孫

面白ぬ月とて　摂政の中の君

思ふ人ぬ変ぬ

或の内親王　後白河院皇女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

殿富門院大納言　殿富門院皇女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二條院讃岐　[illegible]女

[illegible]

鎌倉右大臣頼朝公実朝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

素覆法心の俳風小夜ふく[illegible]衣打なり

此歌を宗白雪撰[illegible]

[illegible]

侍[illegible]

結ん蓬[illegible]

[illegible]

[illegible]

慈恵大師僧正遍昭

慈恵大師僧正遍昭 慈法い和尚号[illegible]

[illegible]

延喜乃[illegible]

[illegible]

入道前太政大臣 西園寺

入道前太政大臣 太政大臣藤原実氏 西園寺を建立[illegible]

[illegible]

[illegible]

てんのいろめと思ひて花をとりあつめて
いはれ
はゝじんとおもふ所と此方とをさして行
ちりまがひて物思へ我身へうつと浦風
もやむ形なくなる音にて仏見御殿花を一
本の貴殿にまつり我もまつり行ふ
ふう所とうく

推中納言定家

あまへとまつる浦のくるさに海やりなれて
さまのかく
まとをかく
あまへとまつる所にうつりをしらるゝ一日見さん
行ふんくるさとや待ひんくるさとけふ海風も
をさまりあつまりて浦の焼煙もうちうちひ行ふと我やも
れもおもふ所のかのうとうへいつうと書院の浦
よ海風くうに美歌まんて行り過ぬ京
うあへと待ひのうしれくるさまとうく焼やも
しかうとひ行ふを見ることうつとけふ海
凡伝とうる事にうる羽ひく美つのんうとき
て此所にのうとうの海くよりやうるもの行り
んや御ゝ姫と海ゝ宇うく豊石とうう海へ
こうあて孔くること所とうう仏形心ありや

百社女王歌
伊勢ものの此所の海風おもひて
侯二位家隆 京中にて

風をうくる所は北斗の名を法師にまかせ
手すさびの秋心
道
山河を法師に預るいと百姿ふるの夏の夕
ひとりの山河とみるに河辺は名を
のこりの秋の心あるべしといふん
しく法師を友のとなる涼しさ初夏
いとめづらしく山ちかくてらせる
涼しくなんしかるべしや山百合の新勅
撰のうへも侍らんとよく守らるべ
んとこそ

後鳥羽院

山平家物語

人とかたらひつるまゝ世をとりあつめ
山法師歌いを道とうつし模さるあり
ものとかりてはあらぬ人
人て恨めりしかあるべき世法
ものとなる歌詠ものやみ人一人のふること
是いかなる事ぞ人のみ
西をかたらひくれるまゝ紙
てあちらこちらの水流れ合
ものこゝさいる花のいとめ

清水寺

賀德院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右百姓東郷（とうごう）別（べつ）二十時左と変よりあひそて西
行して有人文明年号の年發起（ほっき）し作
所帰も同様行つまよりしと見れ人侍受（だんじゅ）
入事ありく明りしと侍ると以なり張の様もよ
ありしまひあしら心の家とくしひ老の法門能
所ことしてしつ切りて出るは和尚出れ
をそうひ行をて禅しかるふ侍くはの
くこと行り想しこうれて知見智（ゆう）行ら
ちへうしと組の部分よりひまを使ふこと
そうをもて西うの雅俗の御のうしの河

さいめく修行は海の部のひらとあしうなま
姿をくなん

文明十年發四月十八日　宗機御

宗機御